

日本語教育実習における協同学習：実習簿の活用 法

著者	英保 すずな, 内藤 裕子
雑誌名	関西外国語大学留学生別科日本語教育論集
巻	24
ページ	105-118
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00005828/

日本語教育実習における協同学習 —実習簿の活用法—

英保 すずな

内藤 裕子

要旨

筆者らは留学生別科における日本語教育実習に参加した実習生に対し、過去3年にわたり毎年アンケートと聞き取り調査を行ってきた。その結果、実習生が学びの場を共有することで気づきの機会が増え、意見交換によって客観的・複眼的自己評価が促されることが示唆された。こうした協同学習は教師力を高めていく上で有効であると考え、2013年の春以来、新たな実習環境の構築を目指して、授業の立案、実施、授業後の内省の全プロセスに実習生が協同で参加する、協同型の実習プログラムへの移行を進めてきた。その一環として、著者らは今回、共同活動を通して得た学びを顕在化させることを企図して実習簿の改訂を行った。従来は「観察記録」の欄に日々の体験を自由記述させる形をとっていたが、新しい実習簿では、与えられた記述の指針に沿って自分の考えを文字化することで、協同体験による気づきを意識化させることを目指した。本稿では、改訂に向けての試用版実習簿のデザインを紹介するとともに、そこに記された実習生の記述から、協同学習体験が学びにどのような変化をもたらしたかを報告する。

【キーワード】 日本語教育実習、協同学習、実習簿

1. はじめに

筆者らは従来の実習の枠組みを見直すべく、3週間の日本語教育実習で実習生が何を、どのように学んでいるのかを明らかにするために、2011年から実習生全員に実習後に聞き取り調査とアンケートを行ってきた(英保・内藤 2013)。その結果、

実習生らは指導教員をモデルとして、そのアプローチをまるごと踏襲しようとする傾向が強いが、それだけではなく実習生同士での情報交換や意見交換を通じてそれまでの自分の既成概念に揺さぶりがかけられることによって問題を新しい視点から見つめ直し、自分に合った教え方を模索していくケースも少なくないことが分かった。個人レベルで行われていたこうした活動を体系化し、全員に参加させることで3週間の実習体験からより多くを学ぶことができると考えた著者らは、実習生同士が問題を提起しあい、意見交換を通じて各自が自分の考えを明確化し、自律的に解決策を見出していけるような実習の枠組みを考え、試行した。以下 1~3 がその中核となる活動である。

1. 仲間の授業実習前のリハーサルに参加し、意見交換をする
2. 仲間の授業実習を実際に見学する、あるいは事後に録画を見る
3. 実習後の反省会に参加し、意見交換をする

2. 協同学習にもとづく実習の概要

ここでは協同学習を念頭に置いた実習の流れを説明する。3週間の実習期間の中で実習生は、最初の一週間は担当教員の授業の見学と並行して、2週目後半から3週目前半にかけてのいずれか1日を選んで行われる授業実習の準備にとりかかる。教案が完成したら、指導教員のチェックを受ける前に実習生仲間参加のもとでリハーサルを行い、意見や感想をのべてもらい、問題点があればアドバイスを求める。活発な話し合いが行われる中で、自分が作成した教案についての論拠を求められたり、問題点を説明するうえで問題意識を明確にする必要にせまられたり、既成概念やピリフに揺さぶりをかけられるのはこの時である。実習生は仲間の様々な意見を聞き、自分の思いを言葉にすることで内省が深まり、自分の授業計画を客観的に見直す機会が与えられる。その結果、この後に行われる指導教員との話し合いにおいても問題点を絞り込むことができ、建設的な話し合いが行われることが期待される。その後授業実習に臨み、まず単独で、続いて授業を見学してくれた実習生ららびに授業の録画を見てくれた実習生らとともに反省会を開き、自身の授業の振り返りを行う。最後に指導教官からコメントをもらい、授業実習の締めくくりとする。授業実習が終わってからは他のレベルの授業観察が許可される。

3. 協同学習を促す実習の環境作り

実習生が協力し合い、協同学習が活発に行われ、リハーサル、互いの見学、反省会での議論等の活動が円滑に行われるように環境を整えた。実習開始前に個々のスケジュールのすり合わせを行うとともに、協同活動のための教室や個人毎の記録媒体(USB)の確保を行い、録画を互いに空き時間に閲覧できるように USB の保管・閲覧場所等を決定し、実習中のタスクについてオリエンテーションで周知を図った。加えて今回は、協同体験を通して感じたこと、考えたことを文字化することで気づきがより顕在化するであろうと考え、1～3の協同活動を通して行われた内省・洞察のプロセスを仔細に記録できるように実習簿の改訂を行った。

今回試用した実習簿（資料1）ではまず、フローチャートで実習のながれがひと目でわかるようにし、実習期間中のタスクを俯瞰的に把握して実習計画を立てやすくするとともに、共同活動のために互いのスケジュール調整をしやすくした。次に、日々の授業観察記録に加えて1～3の活動記録のページを追加し、各項目の書き出しの部分に箇条書きで記述の要点を示し、単なる活動記録にとどまらず、内省のプロセスを記述するよう促した。

さらに実習生仲間や指導教員だけではなく学習者からもフィードバックが得られるように、学習者用アンケート（英語版）のフォームも用意し、授業実習直後に人数分コピーして配布できるようにした。装丁については従来の冊子タイプではなく、必要に応じてページが増やしたり、適宜ハンドアウトや資料を挿入したりできるよう、2穴でファイルに綴じる形にした。

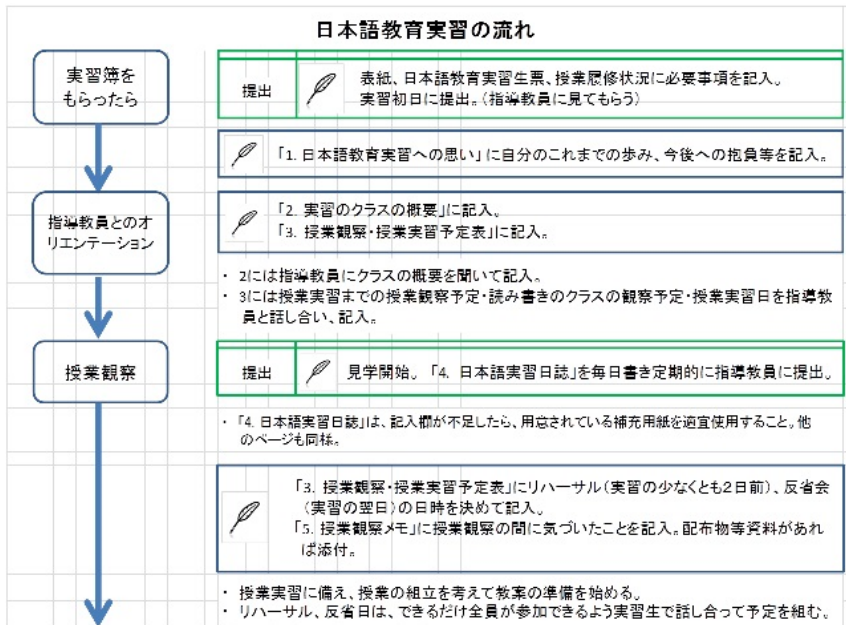
4. 試用版実習簿の使われ方の分析

2014年秋学期には、協同学習を進め易いよう改訂された、試用版実習簿が使用された。すべての協同作業において気づいたことや話し合ったことを書き留めるよう、活動ごとに別個に記述ページを設けた。その使用状況を項目別に分析することにより明らかになった協同学習の効果と課題について述べる。

4.1 実習の流れ（フローチャート）

実習全体の流れとすべき事柄が分かりやすいように実習簿のはじめに図1のようなフローチャートを載せた。

図 1



このフローチャートには指導教員の日々の授業の見学、教案の作成からリハーサル、実習生相互の授業観察、反省会といったタスクの流れと、そのそれぞれの記録を実習簿のどのページにいつ、どのように記録するか、実習期間中に提出するページはどれか、などが詳細に示されている。また、リハーサルの仕方や相互の学び合いのために何をなすべきかといった心構えも記されている。

4.2 実習期間中の日々の記録

実習生は、自分の履修している他の科目も受講しながらの教育実習であるため、授業見学、授業実習の準備、宿題の添削、留学生の補習など、毎日すべきことをこなすのに精一杯である。しかし、短い時間を使って、その日を振り返り、書き留めておくことも重要である。そこには日々の成長の跡が残っているが、気づきの種類や質には個人差が出る。実習期間での学びの質の底上げするためには、内省を助ける必要がある。日誌に書くべき内容を分けて、図2のような指示を加えた。

図 2

4 日本語実習日誌 第 日 (指導教員に提出) 氏名:

月	日 ()	天 候	出勤 退出	午 午	時 時	分 分	指導教員印
時限	クラス	担当教員	内容				
1							
2							
3							
4							
午後							
<small>1. 授業観察、または授業実習から学んだこと 2. その他、宿題添削、学習者との関わり、他の実習生から学んだこと等</small>							
<small>1. 授業観察、または授業実習から学んだこと 2. その他、宿題添削、学習者との関わり、他の実習生から学んだこと等。</small>							

実習生にとっては、書くべき内容がはっきりし、まとめ易くなり、その日の感想だけを書くようなことが見られなくなり、担当教員にとっても読みやすくなった。

それでも、はじめ「クラスによって学生の様子が違っていた」「教具が多く、わかりやすかった」等、具体性に欠ける描写が多かった学生に、そこから何を学び取ったのかが不明であることを指摘すると、徐々に改善され、「たとえば、・・・など、会話を広げて実際に使えるところまで持って行って・・・」と、教師がどのような意図をもって授業を運営しているか気付くようになった。

一方、気づきの多い実習生は、以下に示す記述にもみられるように、ポイントとなる事実を細かに記録し、原因や結果、解決法、授業での活かし方を考えている。

《教師としての気づき》

- ・ (教具の使い方で) 理解が早まることが見てとれた。
- ・ (助詞の間違いで) これは英訳が原因となった間違いだが、学習者にとって難しいポイントであることがわかった。

《気づきを授業に活かす》

- ・ 学習者の理解度の異なるクラスで、学習者の理解に応じて授業内の活動を調整していくことは大切だと思った。
- ・ (語彙力が乏しい学生のチューターをして) 語彙を増やせる、何かいい指導法や教授法はないものかと考えている。

- ・(宿題の添削で)・・・そのような共通のミスを授業で自然な形で直していくことが大切だと考える。
- ・先生のテンポの良さ、それでいて学生のペースにも合わせるということ
を忘れずにいたい。
- ・はい、いいえで答えられない発問をすることで自由に多くを語らせる
ことができ、誤りが増える分、訂正によって学んでもらえることが多くな
る。
- ・学習者の持っているスキーマを活性化させるために、日常的に遭遇する
ような場面・状況設定が必要だと思った。
- ・ペアワークでは学生が自分の言いたいことを言えるためか、とても生き
生きして楽しそうだった。助け合うことでお互いに伸びると思うので、
私もペアワークをすればよかった。
- ・長音や促音など、音だけでは認識しにくいものはかなで文字化して理解
させることが必要だ。
- ・終助詞(だ)ヨネ、(だ)モン、など、自然な表現であっても、どこまでクラ
スで取り入れることができるんだろう。

4.3 授業観察メモ

以前は各自で別のノートなどにメモしていたが、最終的に教師に提出する必要はないという前提でページを用意し、自由にメモを取って実習後も振り返りの一助となるようにした。図なども入れやすいように線は付さず白紙にした。授業観察のポイントがわかりやすいように図3のように指示を入れた。

図 3

5 授業観察メモ

月	日 ()	限	クラス	授業者
授業内容				

授業の進め方、発問や指名の仕方、板書、教具の使い方、学習者の反応等、気付いたことを記録。資料があれば貼付。

1. 授業の進め方
2. 発問や指名の仕方
3. 板書
4. 教具の使い方
5. 学習者の反応等
気付いたことを記録。
資料があれば貼付。

授業の流れを追ってできるだけ細かくノートを取っている実習生が多いが、中には自分でその時々テーマを決めて観察していたり、自分の意見を書き込んだりしている人もいる。メモには流れのみ記入し、日誌に分析を書いていることが多いが、次年度の改訂では、ページを二つに分けて気づきを書くスペースを作り、日誌を書く段階での内省と分析を促すようにしたい。

日誌の中の授業観察に関する記述を見ると、以前に比べ、原因や対策に踏み込んだ記述が多くなった。実習生同士がフィードバックし合うことで学びが深まり、それを意識して実習簿に記録することで、全体の学びの質が変化したことが感じられる。

4.4 授業実習前のリハーサル

協同学習を進めるための三本柱である、実習前のリハーサル、互いの実習の見学、反省会にできるだけ多くの学生が出席できるように実習初日に日程を調整した。各実習生は学部の授業にも出席するので、空きの時間を把握し、実習日に合わせてリハーサルと反省会の日時を決定した。

授業実習を指導教員によって伝授された技術の披露に終わらせず、協同活動で生み出される自発的学びのプロセスの集大成とするため、リハーサルは指導教員の最終チェックを受ける前に行うものとした。実習簿にはリハーサルの日時、参加者を書き込む。実習授業は50分だが、リハーサルの時間は30分しか確保できないので、図4のように、リハーサル前に意見を聞きたい部分を絞り、参加者に教案を配布するように指示した。

図 4

6-1 教案ができたなら（リハーサルと仕上げ）

実習日	月 日 () 限	クラス	授業者
授業内容			
リハーサル日	月 日 ()	時 分～	時 分 参加者

①他の実習生に協力してもらリハーサルで、見てもらいたい点 ②リハーサルをして、他の実習生からもらったアドバイスと改善

1. 他の実習生に協力してもらリハーサルで、見てもらいたい点
2. リハーサルをして、他の実習生からもらったアドバイスと改善点
3. 指導教員からのアドバイスと改善点

参加者も教案作成上の問題点を共有し、それぞれの意見を表明し、議論することで、双方にとって得るものがあったようだ。実習生仲間から次のようなことを指摘され、修正に努めたとの記述がある。

- ・練習に使う絵や字の大きさをわかりやすく修正する
- ・ミスや未習単語を見つけてもらった
- ・カードの見せ方や英語と日本語のバランスについて考え直す
- ・例を出してから練習に入った方がいいと指摘される
- ・練習について他の案が出たので、どちらにするか考える
- ・学習者から似た表現との違いの説明を求められるかもしれないと言われ、答え方を考える
- ・前回の復習にける時間の割合が多すぎるのではないかと言われた
- ・導入、練習の登場人物の設定をどのようにすべきかで議論になった
- ・導入で、話の展開が急すぎると指摘を受け、考える
- ・学習者の反応が期待通りでなかったらどうしようかと相談したところ、色々な意見がもらえて、解決法が見つかった
- ・教師が一人二役をしてわかりやすく導入することができず、ロールカードを学習者に渡して相手役を演じてもらうことにしたが、他の方法で行ったほうがいいのではないかと言われた。

このページの記述によると、リハーサルで出てくる意見は、教案の内容だけでなく、授業者・学習者双方の立場に立ったもので、教材の提示の仕方など、技術的なものから練習の再構築を促すものまで多岐にわたる。英保・内藤(2014)の聞き取り調査のコメントにもあるように、意見交換を通して自分の固定観念から解き放たれたとの意見もあり、グループダイナミクスによる参加者全員の活発な学びの場となっている。

実習簿には、どの実習生も①から③を整理して記述できていたので、他の実習生や指導教員から、アドバイスや新しいアイデアをもらって教案の仕上げをしている様子がわかる。このページに記入することで内省が深まったことがリハーサルを有

意義にする一助となっていたと言えるだろう。

また、リハーサルに参加した実習生が本番の授業実習を観察できた場合、自分が関わった授業計画がどう実践されるのかを観察することができて喜びを感じ、また自分ならどうするか、後でどうアドバイスしようかと解決策も考えながら観察する。それらが実習の疑似体験の場となり、さらに自分の授業の改善にもつながる。授業実習を観察した学生の日誌の記述には、見習いたい点が具体的に述べられ、授業構成、授業進行方法、教材の使い方、アイデア等を挙げている。

指導教員は、実習生同士の協同学習の効果を受け、本質的な指導に集中できるので、実習目標も高く設定できる。

4.5 授業実習後の反省会

実習後には、録画を見ながら自身の実習の振り返りを行った上で、翌日に行われる実習生相互の反省会を経て、更に内省を深めてから、指導教員との反省会に臨む。

実習簿には図5のように分けて記述するよう指示が与えられている。実習簿の改訂を行い、留学生へのアンケートの結果を加える予定である。

図5

6-3 授業実習と反省会を終え、得たこと・今後への課題

実習日	月	日()	限	クラス	授業者
授業内容					

①他の実習生に参加してもらう反省会で、意見をもらいたい点 ②反省会をして他の実習生からもらった意見等 ③指導教員からの講評、今後への課題

1. 他の実習生に参加してもらう反省会で、意見をもらいたい点
2. 反省会をして他の実習生からもらった意見
3. 留学生の意見やアドバイス(追加予定)
4. 指導教員からの講評
5. 今後への課題

下記は、実習生との反省会でもらった意見の一部である。

- ・イントネーションに気を付けること。
- ・立ち位置、目の配り方、絵カードの見せ方とタイミングについて学生の立場になって考える

- ・導入時、わかりやすいように、大袈裟に演技をする
- ・わかりやすい状況設定を考える
- ・文法説明の最後の確認時、教師が全部言うのではなく、学生にクイズ形式で聞いたらどうか
- ・反復練習は全員にしっかりさせることを意識する
- ・指示も日本語で言える部分は日本語で
- ・練習が長いので、テンポよく、変化をつけた練習に
- ・もっと学習者へのフィードバックをする
- ・練習後の発表では、違う人と組ませれば自然な会話になる

仲間の授業実習に参加できなかった実習生のために、録画を USB に保存し、いつでも見られるようにした。反省会では実際の授業実習か録画を見ていない実習生にもポイントが伝わるよう、意見を求めたい点を絞っておき、録画を見せながら反省会をするよう指示した。実際には予定していた時間に集まることが難しく、大半の実習生は個人的に意見をもらうにとどまった。リハーサルに比べ、反省会はなかなか集まることができなかった理由として、時期的に自身の実習も迫っており、その準備に追われることが考えられる。予定されていたように普通教室でプロジェクターに授業の録画を投影して行うまでに至らず、数人で集まって LL 教室のコンピュータで録画を見ながら意見交換をした実習生が大半を占めたことから、反省会は普通教室より LL 教室の方が便利であることがわかった。

少人数で個人的に意見を伝えるのに比べ、実習生が合同で行う反省会の場合では、異なる視点から議論が深まる。それぞれの実習生が観察した先生方のテクニックが披露される等、全員で解決策を考えるという点で、教師としての成長につながる最も重要な機会となる。また、その後に行われる指導教員との反省会での内容もより問題点を絞り込んだ、密度の濃いものとなろう。是非とも実習生同士の反省会を実施しやすくする方策を考えたい。

4.6 教案

以前は、授業前に印刷した状態の書き込みのないものを貼ることになっていたが、今回の実習簿では、気付いた点や反省を書き込んだ、最終版の教案・教材・資料を

ここに貼付するように指示したことで、後で見直した時に、学びを再現しやすい形で保存されるようになった。

4.7 留学生へのアンケート

以前にも自発的に留学生へのアンケートを作成し、実施した実習生がいたが、今回実習簿に図6のようなアンケート用紙を入れた。授業実習終了時に配布し、記入してもらった後その場で回収することで、全員が留学生の意見を自己反省・ほかの実習生との反省会の準備に役立てることができるようにした。

図6

TEACHER EVALUATION QUESTIONNAIRES

Date _____
You _____
Stu _____

Thank you for taking the student teacher to _____
Please check the box _____
have any: _____
5=agree ←

1. 明確な教材の提示	+コメント
2. 明確な指示	+コメント
3. 質問に対する明確な答え	+コメント
4. 教師の日本語使用	+コメント
5. 学生の日本語使用	+コメント
6. 教え方の改善に役立つコメント	

1. The instructor presented the material clearly.
5 4 3 2 1 N/A
comments, if any: [_____]

2. The instructor gave instructions clearly.
5 4 3 2 1 N/A

留学生には教具の使い方や説明の仕方など5項目にわたり5段階で評価した上で、全体としてのコメントを記述式で書いてもらうようにした。留学生のコメントには、実習生を激励するものが多いが、建設的なアドバイスもある。下記はその一部である。

- ・議論になるように持っていく。質問して、学生にもっと日本語を使わせるように。
- ・説明が時々速過ぎた。
- ・文法説明・練習時もう少し変化のある活動があるといい。
- ・会話をリピートする時間が少し長かった。
- ・もう少し大きい声で自信を持って。
- ・声に抑揚をつけて
- ・手書きのハンドアウトは少し読みにくかった。

- ・質問に明確に答えてくれたが、もっと例がほしかった。
- ・ペアワークをもっと活発にさせる。

実習生にとっては、自分の反省を裏付けるものもあり、新鮮なコメントもあるであろう。少し評価の数値の低い部分は、課題として明確になる。留学生からの指摘に対する改善法を考え、実習簿に記録している実習生もいた。そして、上記では引用していないが、学生からの賞賛のコメントも多く寄せられた。それらは何よりも自信とやる気につながったと思われる。

5. 協同学習の効果と課題

グループダイナミクスにもとづいた協同学習の有効性はかねてより遍く知られているところである。しかし、一般的には多くの日本語教育実習の現場においては、いわゆるトレーニング型と呼ばれる実習モデルに沿ったものが多いのが実情である。トレーニング型実習では、指導教員に実習生が見習いのような形で張り付き、教員の指導を受ける。実習生も教師が示すモデルをいかに忠実に模倣することができるかを実習の到達目標と捉えがちだ。しかし、教育実習との本来の目標は、実習終了後に多様な教育現場で多様なニーズを持つ学習者を指導していきける応用力を持つ教師を養成することにある。小手先の知識や技術の伝授ではそうした応用力は培われないだけでなく、教え方についての固定観念が出来上がってしまい、将来的に教師としての成長が妨げられる結果にもなりかねない。

筆者らは実習中のタスクとして実習生相互が互いに密にフィードバックを与え合う機会を創出し、その協同活動がどのように実習生の学びに影響を与えたかを、平成 26 年度実習生に対する聞き取り調査と実習簿の記述内容を検証したところ、仲間を通じて疑似体験、意見交換の機会が増え、実習の中身が濃くなっていることがうかがえた。自分の物の見方、考え方を他者のそれと比較することで固定観念やビリーフが揺さぶられ、内省が深まり、自己概念に修正が加えられる。様々な意見が交わされる中で客観的視点にたって自分の考え方を再検討し、問題解決の方策を模索していく体験が得られたことは、今後教師として成長を遂げていく上で、協同学習を取り入れた教育実習の大きい成果とみなすことができよう。

こうした自己の意識の変化を活動ごとに実習簿に文字化して記述することも、気

づきをより顕在化する契機となっている。リハーサルや反省会などの活動の記録を残すだけでなく、そこで交わされた意見、自分が考えたことなどを思い起こし、考察し、書き記すことで自分の考えを明確にすることができるからである。

指導教員である筆者らもまた、実習生の観察や振り返りの仕方が変化し、実習簿の記述も漠然としたものが減り、問題の原因や対策までよく考えられた記述が多くなったことで、的を絞った指導が可能になったことが実感している。

6. 実習簿の完成に向けて

まず、実習生の心得のページに、プリンタや資料室の使い方、授業見学の手順と心構え等、ガイダンスとしての内容を充実させる。教育実習の評価基準を予め伝え、実習で目指す目標を明確に伝える。無難に実習を終えることが目的ではなく、実習期間中にどれだけ深く学びとったか、また、今後も成長し続ける力をつけることができたかが重要である。そのためには、実習簿の記入にあたっては、内容を具体的に記述し、学びを形に残す努力が必要であろう。

授業観察メモを改訂し、授業の流れと自分の考えを分けて書き込めるようにする。

新たに付け加える用紙としては、実習後の自分の反省を書くページ、見学の申請用紙がある。

次年度の日本語教育実習までに新しい実習簿を完成させ、協同学習を促進し、実習生の学びの一助となればと思う。

参考文献

- 英保すずな・内藤裕子（2013）「日本語教育実習における協同学習—幅広い気づきを促すために—」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第23号 pp.147-161
- 英保すずな・内藤裕子（2014）「日本語教育実習における協同学習—グループダイナミクスの活用—」『関西外国語大学FD委員会高等教育研究論集』第4号（投稿中）

資料 1 (試用版実習簿の構成 ★印は今回の改訂で追加された部分)

	内容
★実習生の心得	
★実習の流れ(フローチャート)	
実習生票	・現住所、帰省先、履修状況 開始時に指導教員に提出
出勤簿	
★実習への思い	
★実習クラスの概要	・期間、クラス(国籍等)、教材と範囲
予定表	・時間割と午後の予定欄 変更時には、コピーを指導教員に提出
実習日誌	・その日の行動を書き込む表 ・授業観察・授業実習から学んだこと ・その他(宿題添削、学習者との関わり、他の実習生から学んだこと等) ・対象のページのみ提出。
★授業観察メモ	・授業の進め方、発問や指名の仕方、板書、教具の使い方、学習者の反応等、気付いたことを記録。実習日誌には、メモを振り返ってポイントを絞り、記入する。 配布された教材・資料を貼るか、2穴で綴じる。 ・教員に提出はしないが、コピーを取り、控室の共有ファイルに綴じる。
★教案ができたなら	・実習生同士のリハーサルで見てもらいたい点 ・リハーサルでもらったアドバイスと改善点 ・指導教員からのアドバイスと改善点
★学習者へのアンケート	・授業実習直後に配布回収。
★授業実習と反省会・課題	・自己採点、学習者のアンケートから他の実習生に反省会で意見をもらいたい点 ・反省会でもらった意見 ・指導教員からの講評 ・今後への課題
授業実習の教案	・反省なども書き込んだ、最終版の教案・教材・資料を貼るか、2穴で綴じる。
教育実習を振り返って	
指導教員から実習生への講評・助言	・実習レポートが提出された後、指導教員が記入。
実習評価表	1. 日本語教師としての自覚 2. 他者の理解と自己の変革 3. 教材研究 4. 授業展開 5. 事務・実務能力 6. 課題、以上6項目と総合所見。 ・今回「課題」の評価を加えた。 実習レポートを適切に準備、提出したか。実習の経験を活かし、最終課題に取り組み、期限内に提出したか。
実習の感想	・感想、後輩へのアドバイス、大学に望むこと 教職センターに提出

